

人はどのように言葉を使い、理解するのか

人間の認知機構と言語の相互関係を探求する学問分野です。」

現在の研究テーマについて、深田先生は次のように語ります。「私は、もともと、他人と自分とで同じ言葉に対するイメージが異なることや同じ状況に対して異なる言葉を当てはめることが不思議でなりません。このような違いを生むきっかけの1つには、幼い頃からの言語経験、例えば、どのような状況でどのような言葉に触れてきているか、があるのではないかと思います。分析対象の1つとして、絵本を取り上げ、子どもが絵本を理解する過程、絵本を通して言葉を覚えていく過程とはどのようなものなのかを研究テーマとしているのは、このためです。子どもは絵本を読み聞かされると、どっぷりとその物語の世界に入り込んでしまいますよね。絵本は、言ってみれば単なる絵と言葉の羅列にすぎないのに、どうしてなのでしょう。その一端でも分かればと思い、言語分析はもちろんのこと、心理実験なども試みています。被験者に絵本をみてもらい、そのときにどんな目の動きがあったかとか、その文から何を感じ取ったかななどを調べたりします。」

言語理解のメカニズムを解く

深田先生は、「子どもが絵本の世界に入り込むきっかけとしては、やはり言葉が重要」と言います。「絵本のなかでどんな言葉が使われていて、それが読み手にどんな影響を与えているかを調べていますが、言語学的観点から言えば、擬音語、擬態語や会話文などが特にイメージを伝える機能を果たしているようです。また、読み聞かせる大人が声音を変えたりすると、臨場感がでてきます。絵本を読み聞かせるお母さんやおばあさんなどの、養育者の接し方も影響を与えているわけです。なかなか難しいですが、子どもが経験したことのが、子供を絵本の世界に入り込ませているのかを知りたいと思って研究を続けています。」

「言葉を理解するメカニズムについては、実はあまりよく

分かっていません。人が言葉を生み出す過程については、例えば、生成文法のノーム・チョムスキーなども述べていますが、言葉を聞いた人がそれをどう理解するのかという点についてはあまり研究が為されていません。しかし、理解ができたときに感情移入が始まり、絵本への入り込みが始まると思いますので、理解ということを中心に研究したいと思っています。今、私にも生後8ヶ月になる息子がおります。生後3ヶ月ぐらいいから、私の言っていることを理解しているようにみえるのですが、言葉を理解しているのか、あるいは私の表情をみてそれに反応しているにすぎないのか、よく分かりません。人がどのようにして言葉を自分のものとしていくのか、その過程を解き明かしたいと思います。息子はどんどん成長していきますので、息子の成長にまけないように研究をしたいと思っています。」

主客未分の日本文化を活かした言語理論

今後の研究について、深田先生は抱負を語ります。「現在、科学はアメリカを中心に発展しています。言語学も同じです。しかし、日本から発信できるものもあるのではないかと思います。私もその仕事に参加したいです。私は、自分が感じてきたことや経験してきたことが、言葉にどのように反映されるかに焦点をあてて研究を進めてきました。主体性、主観性、感性、身体性ということに注意してきました。しかし、科学と言った瞬間に、認知言語学以外の言語学の多くは、これらの観点をなくしてしまうことが多いのが現状です。どちらかといえば、西洋の文化は、自分を排除して客観視できることに価値をおきます。それに対して日本には、主客未分の部分を大事にした、自分と世界とを融合させて物事をみる文化があります。認知言語学は主体性に重きを置く言語学ですが、その中で、さらに、主客未分を大切にする日本的な見方を前面に押し出してもいいのではないかと思います。そうして日本発の言語理論、科学理論ができればいいのではないかと思います。」

言葉の大切さを感じてもらいたい

深田先生は、本学で語学の授業も担当していますが、授業のなかでヘミングウェイの短編を取り上げ、そこに描かれた人間関係や情景を思い浮かべて読むために、学生に位置関係や動きを絵と言葉で示させたそうです。「私自身も黒板に絵を描いて説明しました。そうやって情景を思い浮かべると、逐語訳だけでは十分にニュアンスが伝わらないことを教えました。微妙なニュアンスの違いは大切だと思います。いわゆる理系の学問では、できるだけニュアンスの部分を棄てて、数式や図などで、これしかないという表現を目指します。しかし、これだけじゃないという世界が世の中にあって、社会に出て人と何かをつくろうとするときには、そういう曖昧さが障害になったり、逆にいいものをつくる契機になったりします。人と人をつなぐために言葉があって、時には誤解が生まれることもあります。言葉のおかげでうまくいくこともあります。私は日々言葉の大事さを痛感していますが、学生にも言葉を大事にしないといけないと感じてもらえるようにしたいです。」



大学院工芸科学研究科
言語・文化部門
深田 智准教授

認知言語学とは

深田智准教授の専門は認知言語学です。「認知言語学では、言葉の世界を探索するために、書かれたテキストだけでなく、実際の会話データや創造的な言語使用などにも注目しながら、なぜそういう言葉が出てきたのか、頭のなかでどのような処理がなされているのか、心は何をどのように感じとって、それをどんな言葉で表現しているのか、などを考察します。心をつくりあげた背景に何があるかという問題も対象となってきますので、歴史や文化なども関連してきます。認知言語学は、認知科学や心理学の知見を援用しながら、